大津小便り

平成二十八年
NO十二
十二月十三日（火）
文責　吉良智恵美

「あの日を語ること」は、「未来を語ること」

三年ほど前、私は、あの東日本大震災による大津波で住民の十人に一人が亡くなったという宮城県女川町の女川第一中を訪れました。そこで当時、防災主幹をされていた佐藤敏郎先生に出会ったのです。当時の女川第一中での対応や避難所の様子、学校の防災対策で大事なことを具体的に説明していただきましたが、その説明の最後に、「実は、自分の六年生の娘は、大川小学校に通っていて、私が中学校で子どもたちへの対応をしている時、あの津波で亡くなりました。」という話をされました。・・・一緒に話を聞いていた者は驚き黙り込み、佐藤先生に対して何も言葉を返せなかったことを覚えています。

その佐藤先生にお願いして、十二月六日の郡市校長会研修会で講話をしてもらいました。子どもたちの心を癒やすために、佐藤先生は、俳句や絵、特別活動などを通して、子どもたちが心にしまい込んでいる痛みや辛さを表現させられたそうです。女川第一中の子どもたちは、被災後わずか二ヶ月の時でもあり、その取組（思いを語らせること）がいいのかどうか確信はなかったそうです。しかし、結果的には、「語る」ことで、子どもたちは元気を取り戻し前に向かって一歩を踏み出したのです。「語る」時、大切なことは、それをうなずいて聞いてくれる人、受け止める人がいることだとも言われました。「あの日を語ること」は、未来を語ること」とは、佐藤先生が、立ち直っていった子どもの姿を見て思われた言葉です。そのことが「防災」にもなるとも言われました。「被災を言い訳にしない。」とも・・。大津小の子どもたちも、地震から七ヶ月が過ぎました。今、全校で、地震の時のことやその後のことを「語り合う」取組を始めました。実は南西小から本校に来てくれた子どもたちと本校の子どもたちが、自分の地震体験について語り合うことは出来ていませんでした。個別に子どもたちの話を受け取ることは大事にしてきましたが、学級全体で語り合うことについては、多くの教師が一歩踏み出せなかったのです。思い出させることに不安を感じていたからです。

でも、最近の子どもたちの様子を見て、互いに語り合い、知り合い、分かち合う時期ではないかと思ったのです。佐藤先生の話も背中を押してくれました。

・・・

「見たことない　女川町を　受け止める」

がれきと化した女川の町を見た生徒が、五月に書いた俳句だそうです。

「遭いたくて　でも会えなくて　遭いたくて」

・・母親を亡くした生徒さんの句です。

「がれきの町　女川照らす　その笑顔」

「がれきの町　夢追いかけて　走り出す」

（「女川一中生の句　あの日から」より）

・・・

佐藤先生の話を聞いて実施したのが、二年前の「大津小学校総合防災訓練」でした。まるで、今回の地震を予想していたような形になりましたが、大地震を想定した、避難訓練・避難所ミニ体験・保護者への引き渡しを行いました。

十二月十四日（水）の「教育の日」に、当時協力して頂いた区長さんや消防団長さん、防災士さんの方に参加してもらい、今回の地震を受けての「大津小校区防災ディスカッション」を実施します。

熊本地震では、「自助と共助」の大切さが分かりました。その視点から、本校の防災対策のこれからをディスカッションします。午後一時から、本校の図書室にて行います。傍聴自由です。是非、授業参観の合間に、お立ち寄りください。

十八日（日）は、授業参観及び学級懇談会です。十九日（月）は代日休ですので、間違えないようにお願いします。

すきまスイッチ（しんたさん）から、電子ピアノを一台頂きました。・・・十二月九日（金）

ロアッソの巻選手と株式会社えがおの方が、しんたさんの代わりに届けて下さいました。

ＫＫＴの取材に緊張しながら、児童会役員の子どもたちが代表で受け取りお礼を伝えました。

その後運動場に出た巻選手は、あっと言う間に待ち受けた子どもたちに囲まれ、もみくちゃ状態。ゴールキーパー模擬体験？で、巻選手のゆるいシュートを受けて喜ぶ子どもたちでした。

また、東京江東区の香取小学校の五年生から頂いた義援金の使い道について、本校の五年生の提案で購入したストラックアウトにも挑戦した巻選手でした。また来てくださいね。

すきまスイッチのしんたさんも、ありがとうございました。感謝の気持ちを寄せ書きでお渡しした子どもたちでした。

歩実さんが、今練習している曲を弾いてくれました。これまで、たくさんの皆さんが、地震のお見舞いを届けてくださいました。全員が元気になり、安心で安全な大津小の生活を創りあげることで感謝を伝えたいと思います。

すきまスイッチのしんたさんのサイン：「歌をきいて、歌をうたってください」「いつか遊びにいきます」と書いてくださいました。